【 42 】

氏　　名	鶴田(三好) 智子（つるたみよし ともこ）
学位(専攻分野)	博　士（教育学）
学位記番号	教　博　第 37 号
学位授与の日付	平成 16 年 5 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	教育学研究科臨床教育学専攻
学位論文題目	「集団」との関わりからみた青年期の個別性生成について ——女性のあり方に注目して——
論文調査委員	(主査) 教授 岡田康伸　教授 伊藤良子　助教授 桑原知子

論文内容の要旨

本論文は3部からなる。1部は「“個”—“集団”間葛藤の観点からみた青年期後期の自我同一性形成過程」と題されている。本論文が自我同一性形成過程の研究から発展してきたことが窺える。大学生252名（男性125名，女性127名）に“集団”との葛藤様態類型化のための質問紙と対“集団”関係質問紙と同一性質問紙の3つの質問紙を実施した。3つの質問紙の関係から“集団”との葛藤の様態と葛藤解決のあり方には，男女で違いが見うけられることを示した。男性は葛藤経験の後，“集団”への依存を斥け，分離の方向に向かう発達的経路が認められたのに対して，女性は葛藤経験なし群において，ほどほどの自己依拠感と高い心理的安定性が示され，“集団”との葛藤が，必ずしも発達的に不可欠な契機であるとは認められなかった。また，葛藤を経験した場合は，男性と同様の方向性に，より心的負担が伴われることとともに，逆に“集団”への一体化を強めることも認められた。また，女性の個別性生成が他との分離や“個”としての分立を重視する視点のみでは拾いきれない多様性をもっていることが明らかになった。

第2部は「青年期女性の同性友人グループとの関わりにおける個別性生成について」と題され，5章から成る。第1章は「青年期初期の同性友人関係が有する発達的意味とその性差について」と題されている。ここで，青年期の特徴をエリアーデM.のイニシエーションの意味やホールG.S.や笠原などの考えを紹介している。また，仲間集団に関してはサリバンH.S.の同性友人関係“チャム”についても言及する。先行研究にみられる同性友人関係における男女差をレビューし，女性に焦点づけることを明確にする。すなわち，女性の同性友人関係は，馴染みのある関係基盤を引き継ぎ，青年期初期の移行の過程を支えるとともに，関係性の質の変容（“つながり直し”）に関わる器の一つとして機能していることを主張した。

第2章は「青年期の女性の同性友人グループにかんする一研究—対グループ態度評価尺度作成の試み—」と題され，質問紙による調査を検討している。調査1では26名の女子大学生に，質問A：同性友人グループのどういったところが良いと感じるか，また，悪いと感じるか，質問B：同性友人グループでの関わりで，大事だと思い心にとめていることはあるか，それはどういったものか，と自由記述で問うた。グループでの関わりは，個々に安心感や充実感をもたらす一方，こうした関わりが主に情緒的な同質性に基づいているために，異質なものを排斥する傾向をもっていることが考えられること，一方グループを自己の独自性を疎外するものと捉えている場合でも，グループとは何らかの関わりをもつ必要があると認識されていることなどが明らかになった。調査2では139名の女子短大生に調査1で得られた内容をもとに，グループ認識質問紙とグループ関わり質問紙を施行し，分析した。女性の同性友人グループはその場での存在に関わる安心感や情緒的な充足感をもたらす。一方，それが，一様であることの強い要請によって実現されている側面があるために，異質と感じられる存在を排斥する傾向をもっていることなどが考察された。

第3章は「青年期女子の同性友人グループに関する理論的考察—個人の排斥というグループ力動に注目して—」と題されている。女性の同性友人グループをめぐる個人の排斥という力動が，個々の自己形成の営みといかに関連して生じており，個別性生成過程の中でどのような意味を持っているのか面接調査で語られた2つの体験談を，ジラールRとラカンの考え

方を基に，考察された。スケープゴートの産出やグループは，全体としての“つながり直し”における，いわば，“重要な休憩所”として理解できるなどと考察された。

第４章は「女子短大生を対象としたクラス内友人グループについての検討―グループメンバーとの同一視のあり方から―」と題されている。女子短大生125名に３つの質問紙を実施した。グループへの同一視の強さが自己像を形作るのに強く依拠することなどを明らかにした。

第５章は「女子短大生の同性友人グループとの関わりにおける自己の個別性のあり方―イメージ画を用いた検討―」と題されている。ここでは，女子短大生125名に，調査１：イメージ画（自己とグループの関係をイメージにして絵に描く）と調査２：14名に面接調査を実施した。なお，実際の調査の対象はイメージ画では５名が白紙で，120名が，また，面接調査では６名が友人をともない，友人をも含めたので，計23名であった。女性の個別性は“つながり直し”の様相に応じて，多様性を孕みつつ生成されてゆくなどと考察された。

第３部は「超越的次元とのつながりという観点からみた個別性生成過程に関する臨床心理学的考察――青年期女性のイメージと夢を素材として―」と題されている。ここでは，理論的考察と一青年期女性のイメージと夢を基に，“つながり直し”と女性性に根ざした個別性生成のプロセスが考察された。日本社会において“個”としての独立を希求する女性のアニムスの問題に，河合がいう日本神話のヒルコが日本の神神の中に再帰させることのテーマが内包されているなどと考察された。

論文審査の結果の要旨

本論文は，個が確立していく時，集団からさまざまな影響を受ける点に注目し，青年期における個別性生成の在り様について，“集団”との関わりという観点から検討を試みたものである。他者と関わりをもつことと，自己を個として成り立たせてゆくことをいかに共存させていくかを考察したものである。著者の心理臨床家としての実践の歩みと研究者としての歩みのひとつのまとめとして位置付けられる。すなわち，第１部は卒業論文を加筆したものであり，修士論文を経て，新たに加筆したものである。このため，多少の揺れが見られる。たとえば，同一性形成の確立に関心があったところから始まり，個別性生成へと関心が移動し，しかも，女性の個別性生成に焦点づけられるようになっていった。これは，著者自身の研究者としての在り方と著者の成長とが深く関連する論文となっていると考えられる。

人格形成や個の確立や自己形成や個性化などというのでなく，“個別性生成”としたところに，著者のねらいがある。しかし，個別性生成とはなにかがそれほど明確に定義されているのでなく，前後の関係のなかから，その意味を明らかにする。すなわち，「個は――他者とのつながりによって生を受け，他者とのつながりの中で生を営むがゆえに，集合的な素地を備えつつも，同時に極めて個別的なものもあるはずだ――」などと。これらからは，個別性とは「自分なりのもの，自分独自のもの」となろう。使われた概念が少し曖昧になったことは否めない。同じことは“集団”という用語にも当てはまる。“　”で使われており，集団という言葉にそれなりに意味があることを明らかにしているが，もう少し工夫があってもよかったのではないかという意見もあった。ほとんど“仲間”という意味合いが濃いとは理解できるがそれだけでもない。著者も仲間を中心にしながら，いろいろな集団からうける影響をも含んだ使用をしたという。このように使用された概念が問題になった。題名もどの言葉（集団，関わり，青年期，個別性，生成，女性のあり方）も大きな概念であり，これ自体が難しいと指摘された。

ジラールやラカンやユングや河合などを理論的背景とするために多数の人のレビューがなされている。それだけのレビューは評価された。しかし，それらの理論の連関性があまり明確にされていないことが指摘された。また，著者はどれに一番近いのかと問題にされた。ユング派的な考えなのだが，自己や個性化などの用語を使用せず，「個別性生成」としており，立場を明確にするのも大切であろうと話し合われた。

４つの質問紙による調査と一事例が記述されており，その努力は評価できる。また，質問紙調査のそれぞれは興味深い。しかし，４つの調査の連関が少し希薄になっている。著者の卒論からの歩みの中でのものであり，それもしかたがないかもしれないが，おしまれるところでもある。質問紙調査法ではあるが，質的研究でもある。すると，被調査者の特徴（ここでは，女子短大生のこと）が大きな問題であろう。女子短大生の調査結果であり，男性の存在が問題にされていない。集団や社会には男性がおり，そこからの影響も大きい。このことを踏まえての考察がどこかで必要ではなかったかという指摘があ

った。女性の個別性生成の問題は仲間だけでなくさまざまな人からの影響があり，それらについては今後の課題であろう。

イメージ画による調査及び第3部でのイメージ及び夢は興味深かった。しかし，ここで使われているイメージもイメージ画と第3部のイメージとでその意味が違う。前者は図式的，説明的であり，後者は象徴性豊かな，無意識的表象としてのイメージである。もう少し「イメージ」の使い方に配慮があってもよかった。事例の女性が母親との関係で，実の母親というよりも普遍的な母との関係で「つなぎ直し」をしていくのは，感動的であったなどの感想もあった。

個の確立，すなわち，個別性生成の過程は男女差があることは従来から主張されている。本論文はこれをさらに明らかにし，女性の個別性生成を“集団”との関わりに絞って研究したことは興味深い。また，それを質問紙調査法による外的研究だけでなく，心理臨床学的に一事例を通して，そのクライエントのイメージや夢を示すことで，個人の内界にある普遍性，集合性を示しえたのは評価できる。いくつかの問題はあるにしても，本論文の価値を低しめるものではない。十分に博士論文として価値あると考える。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また，平成16年4月28日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。